様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：３２６１７
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2017～2019
課題番号：１６ＫＫ００３２

研究課題名（和文）1960年代の国際開発援助とイギリス植民地科学者―アフリカへの技術援助を中心に（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）The Role of Colonial Scientists in International Development Aid for Rural Africa in the 1960s(Fostering Joint International Research)

研究代表者
水野　祥子（Mizuno, Shoko）

駒澤大学・経済学部・教授

研究者番号：４０３７２６０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,000,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究はイギリス植民地科学者の開発構想が独立期の途上国に対する国際開発援助に与えた影響を実証的に解明した。熱帯アフリカ植民地の農村開発にかかわった主要人物を取り上げ、どのような開発の思想や実践を構築したかを考察した。さらに、途上国の開発に携わる科学者の知や技術が交換され、共有される場として国際会議を取り上げた。イギリスの植民地科学者の経験知が技術援助のあり方をめぐる議論のなかでいかに位置づけられたかを検討し、途上国に対する新たな開発のあり方を示唆するような知的枠組みを提供した可能性を探るとともに、1960年代の開発思想の多様性と変化を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでのアフリカに対する開発援助を分析した研究では、技術援助の実態が明らかにされてこなかった。本研究では、受入機関であるロンドン・キングスカレッジのサラ・ストックウェル教授との共同研究により、欧米型開発モデルの押し付けというステレオタイプ化した分析枠組みを見直し、近代化論や新植民地主義という文脈のなかに位置づけられてきた開発援助を新たな視座から捉え直した。さらに、植民地期の「エコロジカルな開発」構想が、従来の開発を見直す契機とされた1972年の国連人間環境会議に重要な知的枠組みを提供したことを示し、開発と環境をつなぐ視点を明確にした。

研究成果の概要（英文）：This study explores the relationship between colonial development and international development aid in the 1960s. Particularly, it sheds light on the developmental ideas and practices based on ecological principles and conservation, which were generated among colonial scientists in Africa from the 1930s. This study also deals with the major international scientific conferences on technical assistance in the 1960s held by the UN, UNESCO, and other international agencies. By examining how this ‘eco-development’ was discussed in multilateral scientific networks, we could find that there was a radical and ‘ecological’ shift in the arguments on international development aid in the late 1960s.

研究分野：イギリス現代史

キーワード：開発　環境　イギリス帝国　アフリカ　国際援助　植民地科学者　エコロジー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、「第二次大戦後のイギリス帝国における開発概念の再検討—アフリカ農村開発計画を中心に」（基盤研究Ｃ：2014～2016 年度）において、1940～50 年代の東アフリカにおける主要な農村開発計画の立案者や野外調査員の議論を検証した。その結果、植民地科学者の開発構想にはエコロジカルなファクターの重視という特徴があることを明らかにした。従来の研究では、植民地の開発計画は西洋近代科学に基づく単純化、標準化された方法で自然や住民を管理することを目的としており、現地の生態環境や社会状況を無視した案が作成され、施行されたと論じられてきたが、本研究では植民地政府内部の多様性を示し、植民地におけるステレオタイプ化した開発概念を捉え直した。さらに、1950 年以降、ヨーロッパ列強の間で技術援助体制が構築されるプロセスを検証した。そして、これらの国々の植民地科学者がアフリカの熱帯環境の特異性を強調し、農村開発計画は現地の生態環境と社会状況に基づいて立案すべきだという意見を共有するようになったことを指摘した。

このように、植民地期末期のアフリカ開発の実践者として植民地科学者に注目し、その開発思想を明らかにしてきたが、それがアフリカの多くの植民地が独立した 1960 年代の国際開発援助のあり方にいかなる影響を与えたかについてはさらなる実証研究が必要であると考えた。というのも、近年、国際開発援助とヨーロッパ植民地主義との関係を一次史料を用いて分析する歴史研究が始まっているが、その主な関心は援助国－被援助国間の資金援助の規模を明らかにすることにあり、それ以外の具体的な局面が見えてこないからである。

２．研究の目的

そこで、本研究では、技術援助（technical assistance）に着目し、イギリス植民地科学者の開発構想が独立期の途上国に対する国際開発援助に与えた影響を実証的に解明しようと試みた。

１）熱帯アフリカの農村開発にかかわった主要人物を取り上げ、援助計画の立案、実施、結果のフィードバックを通してかれらがどのような開発の思想や実践を構築したかを考察した。特に、植民地期末期のアフリカ農村開発計画の過程で、生態環境とそれを利用する現地住民の慣習との遭遇によって得られた知が途上国への技術援助のなかでどのように受容（あるいは拒絶）されたのかに注目した。開発学の分野では、1960 年代の開発理論の特徴として、西洋型経済成長の進展と西洋社会を規範とする「近代化」の追及が挙げられるが、本研究では新たなパースペクティヴを導入するよう試みた。

２）途上国の開発に携わる科学者の知や技術が交換され、共有される場として国際会議を分析した。国際開発援助におけるアメリカの貢献は、確かに資金面では際立っていたといえるが、人的資源という面では、イギリスをはじめ植民地を所有していたヨーロッパの国々の役割はきわめて重大なものであった。本研究では、イギリスの植民地科学者の経験知が技術援助のあり方をめぐる議論のなかでいかに位置づけられたかを検討し、途上国に対する新たな開発のあり方を示唆するような知的枠組みを提供した可能性を探るとともに、1960 年代の開発思想の多様性と変化を明らかにした。

３．研究の方法

１）英領アフリカの植民地開発において中心的な役割を果たし、植民地独立後は海外開発省や FAO などの国際機関で活躍した科学者（E・B・ワージントン、フレイザー・ダーリング、H・C・ペレイラ、E・W・ラッセル、レスリー・ブラウン、ジョン・フィリプスなど）の報告書や論文など（主に大英図書館、国立文書館、キングス・カレッジ附属図書館所蔵）を検討した。生産力の向上、土壌保全の問題と現地の社会や慣習、生態環境との関連がいかに捉えられ、機械化や化学肥料の使用などの近代化の可能性がいかに論じられたかを明らかにし、かれらの提唱した開発のあり方を考察した。さらに、オクスフォード大学およびケンブリッジ大学附属図書館所蔵の覚書や私信などの未刊行史料にもあたって、かれらが植民地開発によって得た知が独立期の技術援助計画の立案や戦略にいかなる影響を与えたかをたどった。

２）1960 年代には国連をはじめさまざまな国際機関が途上国の開発のあり方をめぐって専門家会議を開催したが、なかでも五つの重要な会議（①1963 年にジュネーブで開催された「途上国のための科学技術適用に関する国連会議(UN Conference on the Application of Science and Technology for the Benefit of the Less Developed Areas)」、②1963 年ナイロビで開かれた国際自然保全連合（IUCN）の第九回技術会議、③1964 年 UNESCO がラゴスで開催した「アフリカにおける自然資源の調査・保全・利用のための研究・養成機関に関する国際会議(International Conference on the Organization of Research and Training in Africa in Relation to the Study, Conservation and Utilization of Natural Resources)④1968 年に UNESCO がパリで開催した「生物圏における資源の合理的活用と保全の科学的根拠に関する政府間専門家会議(Intergovernmental Conference of Experts on the Scientific Basis for Rational Use and Conservation of the Resources of the Biosphere)」、⑤1968 年に Conservation Foundation とワシントン大学の共催によりヴァージニア州ウォレントンで開催された「国際開発のエコロジカルな局面に関する会議(Conference on the Ecological Aspects of International Development)」）をとりあげ、議事録や決議を分析した。刊行史料に加え、UNESCO や IUCN の文書館が所蔵する未刊行史料も参照した。これらの会議には、イギリス植民地科学者として長年の経験をもつ人々が参加していた。かれらの報告内容と会議での発言、また、かれらへの反応や議

論の展開を検証することにより、開発が生態環境に及ぼした負のインパクトや開発と環境との両立という視点が国際的な開発援助ネットワークのなかでいかに評価されたのかを明らかにし、国際機関による開発援助計画にイギリスの植民地科学者の開発思想や実践が及ぼした影響を考察した。

４．研究成果

１）共同研究者のサラ・ストックウェル教授は、20 世紀のイギリス帝国史、特に脱植民地期の英領アフリカ開発に関して多くの著作をもつ。近年は、脱植民地期に重視されるようになった援助形態として「技術援助」へ関心を寄せており、技術援助の実践および実践者に関する研究の必要性を指摘している点で、研究代表者と問題関心を共有している。イギリス滞在期間中は定期的にストックウェル教授と会談し、研究の進捗状況の報告や意見交換を行った。さらに、受入機関であるキングスカレッジのリチャード・ドレイトン教授、デイヴィッド・エジャートン教授（科学技術史、イギリス現代史）とも交流し、多くの刺激や示唆を受けた。

２)2020 年１月には Institute of Historical Research が主催する Imperial and World History Seminar で研究成果を報告し、出席者から研究内容について多岐にわたる質問や有益なアドバイスを受けた。ストックウェル教授との共同研究は今後も継続する予定であり、2021 年度にはストックウェル教授および、共通の友人であり、2015 年の World Economic History Congress でパネル報告をしたウェスト・ヴァージニア大学のジョゼフ・ホッジ准教授を日本に招き、研究セミナーを開催する予定である。アフリカに対する開発援助を扱う本研究は、イギリス帝国史研究者ばかりでなく、アメリカ、ヨーロッパ諸国、日本や国際機関を分析対象とする歴史研究者と問題関心を共有できるテーマであり、さらには開発経済学や国際政治学とも連携できると考えられる。

３）第二次世界大戦後の国際開発援助のはじまりと植民地（特に英領アフリカ）の開発との関係を植民地科学者を切り口に考察した本研究の成果の一部は、2020 年１月に名古屋大学出版会より刊行した水野祥子『エコロジーの世紀と植民地科学者―イギリス帝国・開発・環境』の第２部、特に終章に反映されている。また、近日中には本研究の成果をまとめ、*The Journal of Imperial and Commonwealth History* に投稿する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Shoko Mizuno
２．発表標題 'Eco-Development' : Colonial Scientists in Africa and International Technical Assistance after the Second World War
３．学会等名 Imperial and World History Seminar（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Cristina Joanaz de Melo, Estelita Vaz (eds.)	４．発行年 2017年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 376
３．書名 Environmental History in the Making, vol. 2	

１．著者名 水野 祥子	４．発行年 2020年
２．出版社 名古屋大学出版会	５．総ページ数 264
３．書名 エコロジーの世紀と植民地科学者	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ストックウェル　サラ (Stockwell Sarah)	キングスカレッジ・Department of History・Professor	